

～麻しん・風しんにかからないための唯一の方法は予防接種です～



# 麻しん・風しん混合(MR)ワクチンの 予防接種をうけましょう！

麻しん(はしか)と風しんは、大都市圏を中心に流行し、多くの人と接触する場所での感染がみられます。

平成26年の全国における麻しん患者数は463人と平成25年の約2倍で、4割が10歳未満でした。また、平成26年の全国における風しん患者数は321人でしたが、平成25年は14,344人(大阪市1,388人)と大流行しており、引き続き流行に注意が必要です。

**麻しんと風しんは特別な治療法がなく、予防接種の効果が高い病気です。免疫を持たない人が患者と接触すると、ほとんどの人が発症すると言われ、確実に予防するためには2回の予防接種が必要です。**

## 定期接種対象者(無料で接種できる年齢)

[1期] 生後12～24か月に至るまで(2歳の誕生日前日まで)



**1歳になったら、誕生日プレゼントにワクチン接種を！**

お母さんからの免疫がなくなる1歳を過ぎたら、なるべく早い時期に予防接種を受けることをおすすめします。



[2期] 小学校就学前1年間(年長児：4/1～翌年3/31迄)

**小学校入学準備に2回目のワクチン接種を！**

～2回の接種が必要な理由～

- ①1回接種のみでは免疫がつかなくなったり、免疫が持続せずに麻しんにかかってしまうことがあります。
- ②2回の接種で98～99%の子どもに、麻しんと風しん両方の免疫がつかます。
- ③麻しんにかかると合併症を伴って重症化することがあります。
- ④風しんは妊娠中にかかると出生児に先天性風しん症候群を引き起こすことがあります。
- ⑤将来の進学や就職時に、麻しんワクチンの接種の有無が問われることがあります。



**4月になったら、出来るだけ早く受けて、病気にかからないようにしましょう！**

**無料で接種できるのは翌年の3/31までだよ。**



**1期・2期の期間以外は任意接種となり1万円程度の自己負担がかかります。**

### ▲▽▲接種間隔について▲▽▲

生ワクチン(麻しん風しん・水痘)を接種したあとは27日以上、不活化ワクチン(日本脳炎・インフルエンザなど)を接種したあとは6日以上の間隔をあける必要があります。計画的に接種を受けましょう。

### ▲▽▲副作用について▲▽▲

接種後13日以内に発熱(約6%)や発しん(約1%)がみられますが、通常は1から2日で消失します。まれに一過性の熱性けいれん、脳炎や脳症(100万から150万人に1人以下)がおこることがあります。

## 麻疹はどんな病気ですか？



昔は「命定め（麻疹にかかったら生きるか死ぬかわからないこと）の病気」と言われていました。感染力がきわめて高く、予防接種をしないとほとんどの人がかかる病気です。感染して回復するまで約7～10日間と長いため、身体への負担が強く、合併症によって10人に1人は入院することがあるため、世界レベルでの排除が目標になっています。



### ◆ 感染経路と潜伏期間

患者のせきやくしゃみに含まれる麻疹ウイルスにより空気感染、飛沫感染、接触感染します。潜伏期間は約10～12日です。

### ◆ 症状

主な症状は発熱、せき、鼻水、目の充血、発しんです。最初3～4日間は38℃前後の熱で、一時おさまりかけたあと、再び高熱と発しんが出ます。高熱は3～4日で解熱し、次第に発しんも消失します。

### ◆ 合併症

気管支炎、中耳炎、肺炎、脳炎があり、患者100人中、中耳炎は7～9人、肺炎は1～6人、脳炎は1,000人に2人の割合で発生がみられます。

また、数年から10数年経過した後に発症する亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という慢性に経過する脳炎は、約5万人に1人発生します。さらに麻疹にかかった人は数千人に1人の割合で死亡します。※予防接種を受けると、これらの重い合併症はおこりません。

## 風疹はどんな病気ですか？



発しんや発熱が3日程度で治ることが多いので「三日ばしか」ともいわれます。妊婦が妊娠初期に風疹にかかると、先天性風疹症候群（先天性心疾患、白内障、難聴など）の子どもが生まれる可能性が高くなります。妊娠中の女性は、予防接種を受けることができないため、妊娠前に予防接種を受けておくことが大切です。また、男性も風疹にかかって周囲の妊婦に感染させないように予防接種を受けておくことが大切です。



### ◆ 感染経路と潜伏期間

患者のせきやくしゃみに含まれる風疹ウイルスにより飛沫感染します。潜伏期間は約14～21日です。

### ◆ 症状

主な症状は麻疹より淡い色の赤い発しん、発熱、首の後ろのリンパ節がはれるなどです。その他に、せき、鼻水、目の充血などの症状がみられることもあります。

### ◆ 合併症

関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎が報告されています。患者の中で、血小板減少性紫斑病は約3,000人に1人、脳炎は約6,000人に1人ほどの割合で発症します。大人になってからかかると、子どもの時より重症化する傾向がみられます。

### 【お問い合わせ先】

各保健福祉センター

大阪市保健所感染症対策課

TEL 06-6647-0656

平成27年3月